

台湾現地で視察したホームレス支援団体の活動とソーシャルワークに関する報告

社会福祉学部 福祉援助学科 3年
向坂 仁奈
社会福祉学部 福祉計画学科 3年
熊澤 ちな

I. スタディツアーの動機と目的

中国語の授業の合間に橋本恭子先生から台湾のホームレス支援の話聞いて、現地に行って学んでみたいと考えようになり、2024年3月27日から29日までスタディツアーを実施した。¹

今回のツアーでは台北市萬華区を中心としたホームレス支援・貧困問題への取り組みがテーマとなった。台湾のホームレス人口は台北市が最も多く、台北市では萬華区が最多だからである。² 萬華区は港と川に近いので、歴史的にみても出稼ぎ労働者が多く、古刹として知られる龍山寺の向かいにある艋舺公園は、夜になるとホームレスの生活空間となる。³ そのため、支援団体も集中しており、今回訪れた団体も二箇所を除いてこの地区にある。

台湾衛生福利部の統計によると、台湾のホームレス人口は2022年に3,002人で⁴、日本が2024年に2,820人⁵だったことを考えると、全人口に占

めるホームレスの割合は台湾の方が圧倒的に多い。(台湾の人口：2357万人) その理由として、台湾では日本の生活保護に相当する公的扶助が、戸籍のある自治体でしか申請できないこと、他にも様々な規定があるため認定されるのが難しく、社会住宅が不足していることなども挙げられる。⁶ 一方、行政からの不十分な支援を民間のホームレス支援団体がカバーせざるを得ないため、かえって特徴的で先駆的なソーシャルワークが実践されている。それを現地で実際に見ることで、自らの知見を広げたいと考えた。

II. 視察した団体の紹介

今回のスタディツアーでは、攸惜關懷協會のソーシャルワーカー・李佳庭さんに現地コーディネーターをお願いした。訪問したのは8団体だが、まずは6団体について簡単に紹介し、次に2団体を詳しく紹介する。これらの団体はいずれも

1 参加者は橋本恭子（日本社会事業大学非常勤講師）、福本麻紀（NPO 法人サマリア理事、立教大学講師）、福本息吹（東京女子医科大学看護学部）、向坂仁奈（日本社会事業大学）、熊澤ちな（日本社会事業大学）の5名（敬称略）。

2 行政院全球資訊網「国内指標—遊民人口」の最新の統計（2022年）によると、台湾の直轄市（六都）におけるホームレス人口は以下の通り。台北市 703 人、新北市 483 人、高雄市 376 人、台中市 302 人、台南市 227、桃園市 192 人。
https://www.gender ey.gov.tw/gecdb/Stat_Statistics_Query.aspx?sn=7dMjIu4ek4xGDZnVT%24lrMw%40%40&statsn=zuylyTV8QLmnR0AtnplSw%40%40&d=m9ww9odNZAz2Rc5Ooj%24wIQ%40%40&n=284066（最終閲覧日：2024年8月20日）

3 蕭閔偉・城所哲夫・瀬田史彦「台北市竜山寺地区における住民と地域の自立の関係性を実現するまちづくり」（『公益社団法人 日本都市計画学会 都市計画論文集』Vol.52 No.3、2017年10月）556-567頁。

4 行政院全球資訊網「国内指標—遊民人口」（注2のHPを参照のこと）。

5 厚生労働省（2023）「ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果について」『厚生労働省ホームページ』
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_39817.html（最終閲覧日：2024年8月19日）

6 台湾のホームレス事情については、李玫萱著・橋本恭子訳『私がホームレスだったころ』（白水社、2021年7月）の中山徹氏の「解説」（331-347頁）を参照のこと。

2010年代以降に設立され、スタッフが若いことが特徴である。ホームレス支援のソーシャルワーカーは給料が安いと、女性が圧倒的に多いという。

1. 台湾芒草心慈善協会

2011年に第一線のソーシャルワーカーによって設立されたホームレスのための自立支援組織である。当初は台北市社会局の宿泊助成事業による中継ぎ居住サービスを展開していたが、より柔軟にケースに対応するため、事業申請を止め募金による運営に移行した。女性ホームレス専用のシェルター「潭馨園」や公衆シャワールーム「香香澡堂」なども運営している。また、一般市民への啓発として書籍・李玫萱著『私がホームレスだったころ』（橋本恭子訳、白水社、2021年）の出版、ホームレスが案内する街ガイドなどのプログラムを行っている。潭馨園の開設に伴う予算や運営資金は、台湾を代表する大企業・台湾プラスチック、および王長庚公益信託の協力を得ている。

2. 攸惜關懷協会

2022年に著名な作家・林立青が創設した団体で、社会的弱者・ホームレスの社会復帰を目的としている。社会福祉、社会保障、衣食住のサポートとともに、高圧洗浄機を用いた特殊清掃をメインとした就労支援を行い、労働を通してホームレスに自信と尊厳を取り戻してもらっている。

3. 人生百味

2014年の設立以来、多様な角度からホームレス支援を行っている団体。日々の暮らしの中で発見されたニーズや課題に対してプログラムを作り実践している。日中のホームレスの居場所提供、弁当配布や就労支援を行ったりする直接的支援と、ホームレス対象の文章教室や学校教育に貧困問題を導入する取り組みなどの間接的支援の2本柱で活動している。また、台湾のホームレス支援団体のハブ的役割も果たしているが、それが可能なのは、SWRだけでなく、企業管理やPCを得

意とする幅広い人材が結集しているためである。

4. 五角拌

2021年に設立された団体で、廃品回収・ごみ収集をする貧困者層を支援し、ペットボトルなどの買い取りや、リサイクル商品の販売なども行っている。支援対象者は自分の仕事が環境問題や街の衛生のために有用な仕事だと誇りをもっており、リサイクル商品の開発などは回収者の要望をもとに考えられたものである。また、学生たちに廃品回収の仕事を体験してもらうプログラムなどもある。

5. 心手村培力中心

芒草心協会が2022年から運営を始めたセンターで、ホームレスに生活や就労のための力をつけてもらうための訓練を行なっている。隣接する攸惜關懷協会では力が要る仕事を斡旋しているため男性が多いが、こちらでは細かい手作業やホームレスに提供する弁当を作っているため、女性ホームレスが多い。安定した生活支援のために、ここで働く人たちがシャワーや洗濯機を利用できるようにもしている。

6. 思安

2022年10月以来、台北駅で暮らすホームレスを対象に医療アウトリーチを行っている団体。生活や仕事を立て直すには健康であることが必要だとの考えから、医師や看護師がホームレスの元へ赴き治療を行っている。医療従事者の専門性を尊重し、長く活動を続けてもらうため、寄付や台北市政府、企業財団からの出資をもとに、正当な報酬を支払っている。2023年からは女性ホームレスのためのシェルター運営も行っている。

次に、大水溝二手屋と夢想城郷について、詳しく述べていきたい。

7. 大水溝二手屋（写真1～2）

2016年にコミュニティ実践協会と人生百味との協働により生まれた団体である。資本主義経済とは異なるコミュニティの経済自治を目的とし、店舗は萬華区南機場の国営住宅1階にある。1950年代に建てられた当初、ここはモダンな集合住宅だったが、現在は老朽化し、狭くて家賃も安いいため、住民の大半は貧困層や単身高齢者である。中でも子どもを抱えたシングルマザーはフルタイムの正規雇用が難しいため、大水溝二手屋は彼女らのニーズに合わせてフレキシブルな仕事を提供している。団地の1階に構えたセカンドハンドの店舗で、持ち込まれる製品を再度売れるよう修理したり、接客したり、それぞれが得意な仕事を行っている。

大水溝二手屋は環境問題と貧困問題、町おこしという複数の課題をつなげたアプローチをしていることが特徴で、以下に注目すべき点を挙げる。

まず、パソコン修理などの機械いじりを趣味とする人を招いて、ホームレスの人らが電化製品の修理技術を教わっていることである。自宅では機材や場所が足りないが、大水溝二手屋では趣味が満足に行えるため、彼らも技術を教えることを

歓迎しているようだ。

また、企業との提携があることにも注目したい。近年の企業は社会的責任という観点から社会問題に関心を寄せていて、特に生産者側の企業は環境問題に関心が高いという。基金を設立し、社会的役割に関するコンペの賞金を提供するなど、イメージアップを図る企業もあるため、このような動向に目を向け、資金を確保している。

8. 夢想城郷（写真3）

2014年、台湾師範大学の社会教育学者、徐敏雄氏によって創設された団体である。萬華の剥皮寮歴史街区内で、ホームレスや経済的弱者に対して生活に必要な衣食住の提供といった直接的支援ではなく、アートを通して心理的側面へのアプローチをしている。支援対象者は経済的困難の他、家族や友人などの対人関係に問題を抱えていることが多いため、人間関係の修復にフォーカスしている。

複雑な心の傷を一人で乗り越えることは難しいため、スタッフと一緒に活動に取り組みながら自分自身に向き合っていく。活動には、自分の人生の物語を創作するコース、演劇コース、絵画コースがあり、大人数クラスとマンツーマンクラスに



写真1



写真2



写真3

分かれている。それらの実践と、スタッフやボランティアとの会話を通して、コミュニケーションをはかり、生きる力や人と関わる力を身につけてもらっている。

夢想城郷の注目すべき点としてはまず、アートという文化的な活動を通して、心理的側面からのサポートをしていることである。衣食住に関わる直接的支援以外のアプローチが可能なのは、この地区には支援団体が集中し、相互連携が容易なためである。それによって、情報も集まりやすくなり、一人のホームレスに対して多面的な支援ができるという。

運営資金はFacebookを通した寄付、中でもマンスリーサポートに頼っており、毎月一定額が安定的に入るよう工夫されている点が印象に残った。また、「直接的支援ではない点が面白い」という理由で寄付してくれる人もいるそうだ。

Ⅲ. 全体を通して学んだこと

私は、今回のスタディツアーで学んだことのうち、ソーシャルワークにおいて大切な点は以下の4つであると考えた。

第一に、8つの支援団体に関わる一人ひとりが「人材」として機能していること。例えば大水溝二手屋の場合、シングルマザーに得意なことを生かした仕事を割り振ったり、好きな分野で活躍するボランティアがいたり、各自の個性を強みとして引き出していた。また、スタッフやボランティアの他に、ホームレスや貧困層に理解がある「ご近所さん」や「大家さん」を増やし、関係をつなげるという啓発活動も行っていて、ここに関

わる人すべてが生かされる方法だと考えた。

第二に、支援団体とサポート企業、個人サポーターとの間に相互メリットがあること。つまり、前者は単に後者のボランティア精神や奉仕の心に頼るだけでなく、人的資源や資金を獲得し、反対に後者は、企業イメージの向上を図ったり、個人の趣味を存分に生かせたり、社会福祉が勉強できたり、様々なメリットがあるのだ。

第三に、広報の力も重要であると考えられる。視察した団体では、SNSの活用により寄付金を得ているところが多かった。SNS経由の募金は、街頭募金よりも人的・時間的労力が少ない点が良いと考えられる。また、複数のホームレス支援団体が共同で行う「貧窮人的台北」という大型イベントやホームレス体験プログラム、出前授業などを通し、ホームレスや貧困層について、またその支援の方法について、一般市民に広く知ってもらう啓発活動にも力を入れていた。

第四に、ホームレス・貧困支援という一つの課題に対して様々なアプローチのあることがソーシャルワークにおいて大切だと考えた。大水溝二手屋は環境問題と絡め、夢想城郷は芸術を通した心の癒し、という視点だったように、他の団体もシェルター運営、弁当配布などの生活に直結するものから、専門的な職業スキルの訓練と就労支援、医師・看護師のアウトリーチによる医療支援、自立支援、アドボカシーなど、各々の角度から支援を行っていた。

以上の4点はホームレス・貧困支援の分野に限らず、ソーシャルワーク全般において重要であると考えられる。

今回訪問したいずれの団体も、スタッフは大変な仕事ながらも楽しんでいて、そこで行われるソーシャルワークには人や社会を動かすパワーがあると感じた。それは先に述べた4つのような点から、やりがいのある活動だと感じたからだろう。ソーシャルワークは人や環境を変えていくものだが、ネガティブな感情や義務感で行うより、ポジティブで楽しめる方法がとられると、より多くの人を巻き込んだ動きになると思った。支援者自身

が、支援すること自体を楽しもうと考えると、それぞれの得意分野や好きなことを生かした側面から支援が始まり、結果として多面的なアプローチができるようになるのではないだろうか。また、各々にある苦手な分野や手が回らない部分は他団体と連携することで解決できる。

こうした支援を実現するにはまず、自分の得意なことを磨くことや、見識を広げることはもちろん、他者について、その人自身、好きなこと、生き様、アイデア等を尊重することが大切だと考える。これからソーシャルワークに携わっていく、あるいは社会の一員となる私たちが、広い視野と興味を持つことでより多角的なアプローチが見いだされ、より良いソーシャルワークが始まるだろう。

Ⅳ. 本報告を社大福祉フォーラム 2024 にて発表した際の質疑応答

2024 年 6 月 22 日に日本社会事業大学にて行われた社大福祉フォーラム 2024 の分科会にて報告した際の質疑応答から一部抜粋して簡単に記しておく。

Q 1. 福祉のイメージは地味、固いといったものだが、台湾のおしゃれな建物を見て、日本ではこうした場所で福祉を行うとなると、税金の無駄遣いだと批判されそうだと思う。

A 1. (向坂より) 私自身にも福祉には地味なイメージを持っていたが、今回の訪問でそれが塗り替えられた。人を惹きつけるので、多くの人に興味関心を持ってもらうには良い方法だと思う。実際、私たちも写真映える内装に魅力を感じ、大水溝二手屋でたくさん写真を撮った。日本でも取り入れられたらと思うが、税金を財源とする場合は難しいと思われる。

(コーディネーター：賛川教授より) 日本は不寛容な傾向がある。例えば昼間から飲酒をしているホームレスがいるとして、その相手の身上に寄り添うことを目的に路上で昼から一緒に飲酒することは、関係性構築の有効なアプローチとなるかもしれない。しかし、税金を財源とするホームレス支援の場合にそれを第三者が見たら、SNS で拡散され苦情が殺到し、区長が謝罪に追い込まれることになるだろう。建物についても、税金を使った公的なものはデザイン性を取り入れることは難しいかもしれない。

補足：今回発表した実践はいずれも民間団体が行っているものなので、デザイン性の自由さは税金を使ったものではないということにも由来していると思われる。

Q 2. 日本の福祉で取り入れるべきだと思ったところはるか。

A 2. (熊澤より) SNS の有効的な活用。台湾は Facebook が主流で利用者が多く、広報・啓発と寄付金のお願いが効率的にできるため、利用している団体が多かった。また、Facebook の特性として友達の友達までつながれることを生かし、支援の輪を広げているところがいいと思った。

(向坂より) SNS 上での写真映えを重視する流行に合わせたような内装や、関わる人の趣味を生かしているところ。世俗的なものを見下したり、無駄なものとして排除したりしないで、人を呼べるパワーがあるなら活用した方がいいと思った。

* 本稿は、団体訪問時に橋本が通訳した内容を向坂がその場でタイプし、他のメンバーからの補足を加えて作成した記録「2024 年 3 月スタディーツアーメモ」に依拠したものである。